

# 債務超過を苦に自殺・相続放棄と自宅の代物弁済手続

# R.F.C リスク・カウンセラー & ファイナンシャル・カウンセラー Information & Report

2006.01.18 Vol.2006-01

- ① 住宅ローン(長期借入金)
  - ② 銀行の貸越し借入(短期借入金)
  - ③ 消費者金融(短期借入金)
  - ④ 信販カード(未払金、割賦債務)
  - ⑤ 連帯保証人(保証債務)
- などの他に「信用株式投資」「商品取引」の

ところが、個人の場合においては「シグナル」を見つかるまでの状況は大きく異なるのだ。むしろ、「シグナル」を見つけれないまま債務者が自ら命を絶つてしまう悲しい結果となることさえあるのだ。

だから、債務超過となって経営が行き詰ってきた場合でも、決断すれば打開策を示すこともできる。あるいは、会社整理するなどのアドバイスをすることもできる。また、決断のできない経営者にその行動を促すような支援をすることもできるわけだ。

法人の倒産シグナルについては、様々な切り口から書かれた多くの経営指導書がある。その上、大抵の法人が税理士のアドバイスを得ながら経営に当たっているため、「倒産シグナル」については経営者は勿論のことだが、家族や会社の関係者も何らかの兆候を見つ

## ●法人の倒産シグナルと個人破産シグナルの違い

【ちよと感時記】  
小正月が終わった。走行する車も少なく閑かであった東京の街がにわか騒々しくなる。公園を歩くと縁側にも重なる見上げる櫻の梢。まるで天井が抜けた体育館のように宙が明るい。頼りなげな冬の薄い陽射しだ。この頃に大木の根方に寄り添ったアオキの若い芽を眺めると、沈み花はアズキ色の小さな蕾を芽付けはじめ、冬を過ぎ、大寒が過ぎる頃には目に目覚ましい。窓辺に置いてある鉢植えのスミレも、蔓を切りつめてあったアイビーも、若草のように柔らかな葉が静かに開き、おだやかな陽はテーブルに小さな影を映し出す。若い芽は、新しい年が明けたことを告げる。生きる。生命力のよさに感じさせてくれる。ありがと。(細野)

ような投機性の高い資産運用の失敗により急に顕在化する。今まで見えなかった債務が考えられる。

個人破産シグナルを周囲の人が見つけるのは、個人のプライバシーに立ち入ることになるのでなかなか難しい。それに、債務者自身も住宅ローン以外は債務内容を他人に漏れることを恥ずかしいことと捉えているから、なおさら周囲の人が発見することができないのだ。

## ●周囲に悟られずに解決したい！だが收拾がつかず膨張する債務

住宅ローン債務は、金融機関の審査を経て収入に見合った支払計画により弁済していくものなので、債務者が病で倒れたり、勤務先の倒産などで収入が絶たれた時にトラブルが発生する。

しかし、その場合は家族が全てを知るところにあるからみんまで解決できる。家族に内緒で、事業をしている友人から頼まれて連帯保証人になっていて、その友人が債務の履行が困難になって保証債務の請求がきたりする場合など、家族に見えないままの債務を、何ともならないのに、何とかしようとする。多量債務者になってしまった事例も多い。近頃話題となっている個人のネット投資も気になる。堅実な投資ならいいのだが、素人が投機に手がけて失敗した事例もよく耳にす



何とかなければ、家族にバレないように。金利は高いけど、とりあえず街の消費者金融から借入しておいて、と云ったキツカケで返済の目途のないままに街金融に借りに行つて、やがて二進も三進もいなくなつてしまつた。事業の中で一時的に資金ショートして入金までの繋ぎに街金融に行くのなら理解ができるが、入金が目途がないのに一時凌ぎで街金融から借入するのは、借りる方が悪いといふ云いようがない。

## ●死ぬも人生？生きるも人生！死んで花実が咲くものか！

家族にも云えないまま、自ら命を絶つた。本人が亡くなって数日後には消費者金融会社からひっきりなしに催促の電話が入る。そして信販会社からは請求書や催告書が送達されてくる。調べてみると約二千五百万円の債務があった。直ちに司法書士に相談して、まさきき身近な家族らの「相続放棄」の手続を済ませることにした。

続いて、普段からまったく交流がないような親戚もいるので、相続関係人全員の調査を依頼し、とりあえず連絡が取れる範囲内の相続人に債務を残して自殺したことを連絡した。更に自宅の不動産権利証が家中をくまなく探したが空の袋だけがでてきて肝心の中身が見あたらない。そのうえ家族にまったく覚えのない家族名義のカードが見つかり、何通かの請求書が郵送されてきた。

自宅の「不動産権利証」が見つからないと云うことは、場合によってはまだ見えていない債務が出てくるのかも知れない。見えていない債権者の姿に、残された家族は居ても立ってもいられない状態だ。猛獣が潜む霧深い森の中に取り残されような感じさえしているよつだ。相談してくれさえすれば、家族が力を合わせれば何とかなつた金額なのに。こんな事になる前に、何故なんだ。遺族にとつては、気がつかないまま一緒に生活していたことを、何度も何度も悔やむ言葉を口にしてきたことがとても印象的だつた。

## ●親戚からの借金を理由に代物弁済に因る所有権移転



暖房の効いた事務所ではチューリップは…またたく間に開いてしまった。パチンコ屋なら喜ばれるのだろうが…

自宅を何とか保全しなければ、しかし、遺族は「不動産権利証」が手元にないので途方に暮れていた。幸いにも、と云うには言葉が違つたかも知れないのだが、親戚から数年間に二千万円近い借金があった。行方不明の「不動産権利証」がどこの誰だか分からないが誰かの手に渡っているとしたら大変なことになる。まずは、代物弁済の要件を満たしていたので所有権を親戚の名義に移転登記しておくことにする。

借入先の根抵当権の設定があつたが、時間的に所有権の移転を優先して手続をする段取りを始める。所有権の移転が完了したら、新たな所有者によって債権者に弁済をして根抵当権の解除をすることにした。不動産権利証がないので、司法書士に依頼して「本人確認情報の提供制度」を利用して所有権移転登記の申請をして貰うことになった。売り主となる所有権者の身元を、法務局に代わって証明しなければならぬのだから司法書士も慎重だ。自分が自分であることを証明するのは大変なことだ。身分証明書となる運転免許証、パスポート、自宅を取得した経緯、現在の職業など、間違いなく所有者本人であることを曉聞と提供資料により、司法書士の責任において本人確認が明らかになつた上で登記所に提出する手続が完了する。

権利証がない場合の手続きとして、法務局が本人確認のため「本人限定受取り郵便」を利用する方法。「事前通知制度」もある。この事例の場合は、見えない債権者に対応するために時間的に速く手続きが完了することを優先としたので、「本人確認情報の提供制度」によって移転登記を済ませた。

### ●生きてることって… 本当に素晴らしいはずなのに…

「オギャー…！」と病院の廊下まで響きわたるような産声をあげてこの世に小さな命が生まれ出る。暗い母親の胎内で呼吸もせず永い時を過ごして、この地球上の大気にふれた瞬間…口や鼻の呼吸器官に詰まっていたものを一気に吐く(呼)と云います。

その時…「オギャー！」と大きな声を出し…この初めて息を吐く瞬間が人間の呼吸の始まりです。だから…人間の「呼吸」はまさに文字通りで息を吐(呼)くことから始まり…逝くときは息を吸って(引き取って)亡くなるのだと云います。

家族の期待を一身に浴びながら大切に育まれ…そして社会の多くの人々に守られ人格を形成し…成長し…、やがて家族を持ち…小さな命の誕生を待ちわび出世を祝うときが来る。人は営みを繰り返す。何十年も…何百年の間…繰り返し繰り返し同じようにして今日があります。その世界を超えた人々には、辛いときもあった。悲しいときもあった。嫌なときもあった。苦しいときもあった。怒るときもあった。寂しいときもあった。不安もあった。不満もあった。でも…少しでも自分にとって明日への小さな希望があればこそ…殆どの逆境を切り抜けることができた。

「この世の中に自分を必要としている人がいる…」必要とされる人は、家族なのか…恋人なのか…友人なのか…仕事仲間なのか…。自分を求めてくれる人が何処かにいるのだ…と想うだけでドキドキしてくるものです。

そうだ、その為には…今日は何をしようか…。明日は何をしようか…。来週は…。来月は…。初めは小さかった、自分を必要としてくれる人のために何をしようか…といった「喜ばれたい…」と思う気持ちから、生きているからこそ感じられるもの…大げさに言えば接する人の対応一つでその人に「生きる目標」のような何かが見つかるように思うのです。

### ●誰もが感じているはずの火宅無常の世界なのに…

今までに5人の自殺者の家族と逢い相談を受けたことがある。残された家族にしてみれば「何故相談してくれなかったのか…」「仕事も身に付かず働こうとしなかった…」「一人で部屋に籠もっていた…」などと故人について情景を思い浮かべ話してくれる。

私は精神科医ではない。「リスク・カウンセラー」と称しているが「心理カウンセラー」でもない。ある瞬間には自分が鬱病であったのかも…と想起することもある。そんな自分が、今までに百数十人の債務超過や家族問題などで苦しんでいる人と接してきました。

そして、自分自身も破産した会社の社長としての体験を持って七転八倒しながらも多くの人々に励まされ…支えられて「火宅の人生」を送ってきた。性格に云えば、今も「火宅の人生」のまっただ中にある状況なのでしょう。

だからなのか…自分でも明確には言い切れませんが…、今では息せき切って駆け込んでくる「困っている人」の話を冷静に聴くこともできるし、何を聴いても驚いたり一緒に慌てふためいたりしないで主訴に沿って聴いていられるのかも知れません。

もともと社会そのもの…生きることそのものが煩悩に振り回され喜怒哀楽と不安で燃えさかっているようなものでありますし、諸行無常と云うには大げさかも知れませんが、私たちが生きるこの混沌とした社会が凄まじい勢いで変化していることに気づかされ、只…ただ自然体で流されていくことも一つの生き方としてあるような気がしてきました。

倒産した中小企業経営者や債務超過で自殺した人の計報を聞くと本当に悲しくなります。その自殺した人が特別の人ではなく、自分をも含め、自分たちの周囲にもその予備軍となる人々がいる

リスク・カウンセラー奮闘記

20

と云うことを各自が認識したとき、家族や、友人、知人と接するときの態度が変わってくるのではないのでしょうか。たとえどんなに小さなことであっても、自分に対して何かをしてくれる人がいるとしたら、心から「ありがとう」と感謝の意を伝えられるように心がけることが大切なことだと心底から感じられるといいですね。気持ちを言葉にすることで、自分にしてくれたその人の心に「喜び」「希望」「目標」のようなものが湧き上がり、生きることのすばらしさが感じられるようになると思います。

### ●沈んでいる人が…浮かび上がった時に空を見る？

債権者のことを思い起こすと、自分が会社を倒産させてしまったという過去を声高に云うことは差し控えるべきであると思う時もあります。

しかし一方で、いま順調に事業展開していると思っている経営者には自分と同じ轍を踏んで欲しくない…と思うし、無念にも事業の継続が危ぶまれたり…危機的状態にある経営者には「再起への道」があることを知って元気を取り戻して欲しいと思ってしまいます。

特に、債務超過で苦しんでいる人や、経営に行き詰まって逆境に立たされたと感じている人に対しては「逆境に感謝」と、考え方が変わるようにカウンセリングには十分に時間をとっています。逆境に立ったときこそこれからの夢を実現するための小さな一歩があると信じて欲しいからなのです。

誰もが自分が転んだときの痛みを感じているからこそ、幼子が転んだときに慌てて駆け寄って、転んだ時のその痛みを共有しながら…転んで傷ついた部分をそっと撫でてあげているのだと思います。そうして「チチンブイブイ…痛い痛い飛んでいけー」と幼子と一緒に天の神様(?)に向かって手をかざしました。今でも同じような光景を目にします。

そうなんです。沈んでいた人が水面に浮かび上がった瞬間には溜まっていた息を一気に吐き、何故か天を仰ぎながら大気から大きく息を吸い込むのです。「溜まった息を一気に吐き出す…」だから思いっきり新鮮な空気が吸い込めるのです。その時こそ、「生きている…」と喜びを感じる瞬間なのではないでしょうか。

我田引水かも知れませんが、「天」「天を仰ぐ」という行為が、再起への道のヒントが何処かにあるように思えてならないのです。

それと…鬱のときは下向き加減になり…天を仰ぐことさえ躊躇いがあるのは何故でしょう。

皆さんはどう思われるのでしょうか。



当社のホームページの【定点カメラ】をクリックすると「後樂園ゆうえんち」が観られます。ナイトスポットとして…どうぞご来社ください。